YAMAGA

近代の山鹿の偉人たちシリーズ 017

熊本市長を四期十六年務めた（一九〇五～一九九五）

星子敏雄

鹿本町庄生まれ。旧制鹿本中学卒業後、第五高等学校、東京帝国大学へと進む。大学卒業後は、あこがれとしていた中国大陸へと渡り、満洲国の高級官僚となった。

満洲国の警務総局長まで上りつめたときに終戦を迎え、それから十一年間ソ連に抑留された。

帰国後、熊本市の助役を経て、昭和四十五年に熊本市長に初当選。以後四期十六年の長きにわたって市長を務めた。

「市政の基本は人間の心を大事にすること」として、人間尊重という視点のもと、さまざまな事業が進められた。また、在任中に見せた清廉潔白な政治姿勢は、熊本市民だけではなく、多くの人からの支持を得た。

誕生から学生時代まで

星子敏雄は、明治三十八年（一九〇五）十一月九日、山鹿市鹿本町庄三三九番地（旧稲田村大字庄）の農業を営む星子進とアサの八人兄弟の長男として生まれました。

小学校は稲田小学校に通いました。そのころから成績がズバ抜けてよく、低学年のころから級長（現在の学級委員）を務めるなど、クラスメイトからも頼られる存在だったようです。そして、鹿本中学校（旧制）に入学して、普通五年で卒業するところを、四年で卒業する特待生となりました。高校は、熊本市にあった第五高等学校に進み、大正十四年に卒業。さらに大学は東京帝国大学（現在の東京大学）法学部に見事合格し、昭和三年に卒業しました。

高校時代から*岡倉天心や*宮崎滔天の本を読み、東洋の文化、とりわけ中国に関心を持つようになります。そして「日本精神の真髄を体得し、東洋人としての自覚を把握し、以って社会人として基本念の生活に生きんことを期す（日本の心の本来の姿というものを理解して、東洋人としての自覚をはっきりと知って、それを社会人の生活の基本的な考えとしていきたい）」ことを目的として結成された「東光会」というグループに入り、東洋の精神文化の研究を深めました。

級長任命書
（大正５年　敏雄10歳）

大学に入ってからも、東光会と同じようなグループ、「暁明会」のメンバーとなり、東洋文化研究を深め、中国へのあこがれを熱くしていきます。そして、「アジア発展のために捨て石になっても構わない」という強い決意を決めるようになるのでした。

*岡倉天心…明治時代の美術史研究家。日本の伝統美術の優れた価値を認め、近代日本美術の発展に力を尽くした。

*宮崎滔天…明治から大正時代に活躍した革命家（かくめいか）。日本で孫文（そんぶん・中国の革命家）達を支援して、一九一一年の中国で起きた辛亥（しんがい）革命を支えた。

五族協和を目指して満洲へ

東大卒業後、敏雄は学生時代に養った知識と情熱を胸に中国へ渡るつもりでしたが、両親や親類の反対にあい、仕方なく中国でも日本の支配下にあった中国東北部の関東庁（日本の*租借地であった*関東州の行政庁）に入ることにしました。入庁したのは昭和三年。その前年の昭和二年には昭和金融恐慌が起こり、多くの銀行が倒産するなど、景気の行き先が大変不透明な状況でした。さらに中国では*漢口事件、*第一次山東出兵などが起こるなど緊張した状態で、国内外ともに非常に不安を抱えた時代でした。そのため、家族はこの関東庁へ行くことにも反対したようです。このときの思いを、敏雄は後に振り返り次のように語っています。「（関東庁へ行った）そのときから、日中友好は日本の将来にとって避けられない運命じゃないかと思っていました。そんな気持ちで大陸に渡るとき、親兄弟が止めるのも押し切って行ったわけです。」日本の将来と周辺国との友好関係を願って、全てを投げ打ってでもやり遂げようとする熱い思いで中国大陸へ渡ったのでした。このとき敏雄が考える東アジア社会の理想は、*五族協和の実現でした。

このころから日本では、中国大陸に夢と理想を求め、満洲に渡る若者が次々に増えていました。特に敏雄のふるさとである「庄」からは、彼を頼って大陸に渡った同級生や若者が多かったようです。その中の一人に、現熊本県知事の蒲島郁夫氏の父親（蒲島益太）もいました。

昭和六年、*柳条湖事件をきっかけに、日本軍（関東軍）は中国東北部へ侵攻し*満州事変が起こります。続く七年一月には、欧米諸国などから非難を浴びるなか日本政府が主導して満洲国を誕生させました。このとき敏

青年期の敏雄（左から２番目）

雄は、満洲国の日本人最初の役人として送り込まれました。最初は満洲国国務院民生部警務総課長に就くことになりました。敏雄にとって、この満洲国建国は五族協和という理想が現実になったものと考え、希望にあふれていました。「(満洲国は)五族協和を*国是とした民族協和の精神に基づくものだったのですよ。それを*実践したのです。日本人も、漢民族といわれる中国人も、満洲人も*蒙古人も、朝鮮人もすべて一緒でした。(中略)こうして民族平等の立場において力を合わせて新しい社会をつくろうというのが、満洲建国の目標、理想だったんです。民族*蔑視などは全く無かったのですね。」敏雄は後でこのように、満洲国の建設は東アジアと日本が対等に発展していくことを目指していたという当時の考えを説明しています。

理想実現を夢見た本人としては、仕事を進めていくなかで、あくまで相談的立場をくずさず、日本人と組むことによって日中両国が幸福になることを示そうと一生懸命に努力しました。「日本だけが良くなる…などは*妄念であって、資源の無い日本が自分のみいいように…などは*下司のまた下司の考えなんですよ。世界と共に生きていく…こう思うとき、やはり日本は、まず長い歴史、地理的関係の近い隣人の中国と共に—もちろん韓国もですが—仲良くしていくことが大事だと思います。」この言葉は敏雄が市長を辞めるころの発言ですが、日本友好の願いはこのように最後まで変わらなかったものと考えられます。

昭和 10 年代の東アジア

家族集合写真（上段右から３番目）昭和 10 年代撮影か？

*租借地…ある国が一定期間、別の国に貸す土地のこと。　*関東州…日露戦争後、ロシアから租借権を譲り受けた中国遼東（りょうとう）半島先端部分。　*漢口事件…揚子江（ようすこう）中流の漢口で、日本人居留地が襲われて、日本海軍陸戦隊が発砲した事件。　*第一次山東出兵…中国に住む日本人を保護するという名目で、中国の山東省に出兵した事件。全部で3回行われた。　*五族協和…日本が満洲国を建国したときの根本的な考え方。五族とは、日本人・漢人・朝鮮人・満洲人・蒙古人を指す。　*柳条湖事件…奉天（現在瀋陽）郊外の柳条湖で、南満州鉄道の線路が関東軍によって爆破された事件。　*満州事変…柳条湖事件をきっかけとして、関東軍が満洲を占領した、日本と中国の争い。　*国是…国民の支持を得た国の方針　*実践…実際に自分で行うこと。　*蒙古人…モンゴル人のこと。（当時の本人の発言であり、そのまま表記した）　*蔑視…人を見下すこと。　*妄念…邪悪な思いや誤った考え　*下司…身分の低い役人。「げし」とも読む。

立身出世と日中戦争突入

満洲へ移ってから数年経った昭和八年十二月に、敏雄は甘粕璋子と結婚します。璋子は、当時満映（*満洲映画協会）の理事長で満洲国の影の支配者といわれた甘粕正彦の妹でした。

満洲国政府に任官してからも、敏雄は着々と出世をしていきます。昭和一〇年には奉天省長官官房総務課長、十一年には民生部地方司財務科

コラム　大成功をする家

（現熊本県知事蒲島郁夫氏著『運命』の中から抜粋
ルビと（　）内は今回追記）

私（蒲島知事）の生家は、村の「庄」という集落の中でも一番のボロ家だった。おそらく江戸時代の末期に建てられたものであろう。（中略）

この家は地主である星子家の所有するもので、十年ほど前、次兄が買い取るまで、家賃はもちろん税金すら払っていなかった。なんと寛容な地主だろう。

星子敏雄さんの母上、アサさんによると、この家には面白い「いわく」があった。

この家の住人は、まるで疫病神に取りつかれたようにみんな貧乏だった。そのかわり、ここを出て行ったあとは、みんな大成功をするというのである。

真偽のほどは定かでないにしても、自分の生まれ育った家に、そうした（伝説）があると聞いた時は、子供心にもなんだかうれしかったものだ。

アサさんによると、ここに最初に住んだのは、長野濬平という人であるという。幕末の思想家・横井小楠に学び、製糸業界の大先達で熊本製糸という会社を創業している。

長、十二年に内務局参事…と、どんどんと出世街道を歩んでいきました。

満洲国が建国されてからの初めの三～四年は、日本人は満洲の人たちを表面に押し立てて相談役的立場を守ろうとしましたが、やがて日本人の数が増えるにつれて最初の理想は次第にくずれていきました。中国との関係は悪くなる一方で、朝鮮の人たちも日本人に対する反感が強くなり、日本政府が目指していた五族協和という理想からは遠くかけ離れた状況になっていきました。満洲国の体制を維持するためとはいえ、日本が主導となって多くの人々を犠牲にしていったことは忘れてはなりません。

昭和十二年(一九三七)、日本と中国は*盧溝橋事件をきっかけとして、ついに戦争へ突き進んでいきました。八年間もの長きにわたる日中戦争の始まりです。

そのような中、敏雄は日中戦争に入ってからも着々と責任のある地位へと上がっていきました。昭和十四年には奉天省警務庁長、十五年に総務庁人事処長に、そして終戦直前の昭和二〇年六月には、満洲国の警察を*統括する警務総局長に就任しました。今でいえば警察庁長官にまで上りつめたのでした。そのときわずか三十九才の若さでした。

*満洲映画協会…満洲国の国策映画会社。
*盧溝橋事件…北京の南西郊外にある盧溝橋付近で起こった日本軍と中国軍の軍事衝突事件。日本軍が、夜間軍事演習中に中国軍から発砲があったとして攻撃した。
*統括…まとめること

終戦とソ連抑留

昭和二〇年、敗戦の色が濃くなっていた日本では、各地で空襲が続く一方、六月に沖縄での激しい戦いの後占領され、八月には広島と長崎に原爆が投下されて、多数の犠牲者が出ました。さらに八月九日、日ソ中立条約を一方的に破ったソ連が満洲に攻め込んできました。もはや立ち向かうだけの戦力のない日本軍は、敗走を続けるのみでした。すぐに日本軍は降伏し、満洲にいた多数の日本人が捕らえられました。八月十五日、日本は連合軍に無条件降伏し、長い戦争が終わりを告げました。しかし、ソ連の捕虜となった日本人はすぐに開放されず、シベリアなどソ連の各地に連れて行かされて、とても厳しくて最悪な環境の中、きつい労働をさせられたのです。

敏雄は終戦一カ月後ごろにソ連に捕まり、戦犯第一号としてモスクワに送られました。敏雄は当時の様子を次のように述べています。「私の*抑留生活は最初、モスクワの中央*監獄の*独房でしたが、食事も少なく、寒いことで何べんも死に掛かったのですよ。骨と皮だけとよく言いますが、こうした状態では骨まで小さくなるのですね。」まさに骨身を削る壮絶な生活だったようです。敏雄と一緒に送られた十三人のうち、十名は死亡

資料：ソ連から送った手紙

昭和 27 年（1952）、敏雄がソ連から送った手紙である。

皆様お元気でせうか。過ぎてみれば一瞬の如く、私も生きて居ります。老親のことども思へば心が痛みますがお許し下さい。親戚知友の消息を知り度く思ひます。甘い物、粉乳、ビスケット、肉魚の罐詰、煙草（両切）、冬靴下、日本茶の様な物をお送り下されば幸です。夫々の値段を知ることが出来れば今後のお願に有益です。送金は爲替相場の子係もあり困難でせうから要りません。

璋子殿、苦勞したことだらう。越し方の心切が身に沁みる。思はぬ日とてもない。喜の日を信じて困難にも打ち克って下さい。色々のことに就いては御両親始め甘粕の兄上様、山代千代蔵、渕田正三の小父様とも御相談下さい。　切に皆様の御健勝を祈ります。

一九五二年九月五日　星子敏雄

し、一人は精神に異常をきたしたそうです。結局、運よく生きのびて帰国できたのは、敏雄を含めて二人だけでした。敏雄の家族の話によると、後日帰国した時、敏雄は自分の歯が一本も無かったということでした。いかにひどい生活だったかが想像されます。

*抑留…一定の場所にとどめておくこと。
*監獄…刑務所・少年刑務所・拘置所のこと。
*独房…刑務所などで囚人を一人だけ入れておく部屋。

当時のソ連

帰国

昭和三十一年一〇月十九日、当時の鳩山政権はソビエト連邦と日ソ共同宣言を結び、両国の国交が回復されました。それにともなって、シベリアに抑留されていた人達も解放され、日本へ帰国できることとなりました。当時モスクワの東の小都市ウラジミールにいた敏雄は、シベリア鉄道で極東のナホトカ港へ向い、そこから船で京都府の舞鶴港に着きました。終戦から十一年も経った昭和三十一年一二月二十九日、五十一歳となった敏雄はようやく悲願の帰国を果たしたのでした。

その後、故郷の鹿本町の庄にしばらく暮らした後上京し、昭和三十二年二月十二日、第二六回国会の「海外同胞引揚及び遺家族援護に関する調査特別委員会」の参考人として出席し、ソ連での悲惨な体験談を交えながら、抑留被害者とその遺族を救うように頼みました。しかし、この願いはなかなか通じず、対応はゆっくりとしか進みませんでした。ちなみに、ようやく本格的な対策が取られたのは、平成二十二年六月十六日に成立した「戦後強制抑留者に係る問題に関する特別措置法」によるもので、敏雄らが声を上げてから五十年以上も経ってからのことでした。

熊本市助役へ

昭和三十八年、敏雄は当時の熊本市長であった石坂繁の求めを受けて、熊本市の助役に就任しました。このときのいきさつを敏雄はこう述べています。「もともと坂口さん（坂口主税　後の熊本市長）が私の顔を見るたびに『助役になってくれ』といわれていたんです。それに加えて、林田さん（正治）から『どうして助役にならんか』と激しい*剣幕で叱られました。私も腹が立って『熊本市の助役なんかなるもんか』（笑い）と言っていたのですが…。ところが、坂口さんが熊本市長を辞めて知事選に出られることになり、いろいろ話がある中で、『私も熊本市長ならやってもいいな』と、ちょっと気持ちが動いたことがあるのです。ところが林田さんが来て『あなたが熊本市長になってくれるなら一番いいと思う。しかし選挙は勝たねばならない。ところが選挙で勝つためには名前が熊本市民によく知られていない。（中略）今回は石坂さんに出てもらうので理解してやってほしい』との話でした。（中略）そうして石坂さんが当選され、いつの間にか私のほうは助役にさせられたわけです。」

敏雄が助役になったのは、将来の市長就任を予定したものであったようですが、元々のきっかけというのは、本人の意思よりも周囲の推薦が大きく働いていたようです。

*剣幕…怒って、荒々しい態度や顔つき。

熊本市長就任へ

昭和四十五年八月、八年間務め助役を辞め、その年の十一月、当時の石坂熊本市長が健康上の理由で退職を申し出ました。そこで敏雄は、自民党の公認を受けて熊本市長選挙に立候補しました。この最初の選挙のことを敏雄はこう振り返っています。「実は最初の立候補

の時は、私は何もしなくて、何もかも（自民党）県連会長だった*河津（寅雄）さんが世話をされたのです。選挙作戦まで立てられて…。その時のことです。私が河津さんに「選挙には金が要りますか」と言ったとかで。私は忘れてしまい…。それくらい何も知らずに迎えた第一回目の選挙でした。」

結果、敏雄は八万七千票の支持を受けて見事当選し、昭和四十五年十二月、第二代熊本市長に就任しました。

***河津寅雄**…熊本県の政治家。一九四八年から一九七九年まで小国（おぐに）町町長を務めた。また、一九五七年から一九七九年までの自由民主党熊本県連会長でもあった

敏雄の市政方針

新市長となった敏雄は、最初に『市政だより』でこう市民へ語りかけました。

「七〇年代は人間尊重の時代といわれる。ことに市政の基本は人間の心を大事にすることにあり、そのためには生活環境を整備し、市民の方々が明るく健康で、心豊かに日日の生活が送られるようにしたい。私はそのような考えのもとに、市政運営の新たな構想を練り、従来の総合計画も政治、経済、社会の情勢の移り変わりに*即応できるように市政*遂行計画を立てるつもりである。この*実施のためには、県市の*緊密な協力を基礎に、国の積極的な援助を受け、さらに広く市民の英知と良識、能力を結集して積極的に実現に努めなくてはならないが、私が市民に約束した事項は責任を持って実行する。どうか皆様は、熊本市民の誇りをもって、一人一人の持たれる力と郷土愛とをそれぞれの分野に*具現され、活気あふるる、*風格ある近代的管理都市をつくるために、いっそうのご協力を*切望してやまない」（市政だより　昭和四十六年一月一日）

熊本市長時代

このような言葉をもとに、敏雄は次々と計画立てて事業をすすめ、市民の生活向上に務めたのでした。

星子市長を振り返るとき、よく出されるのが「*清廉潔白」というイメージです。一部では、地味でまじめ過ぎるという*指摘も受けることもありましたが、黒いうわさが全く立たない人でした。

市長を辞めるとき、敏雄に送られた二人の言葉がそれをよく表しています。

「*高潔な人柄は五十六万都市にふさわしい市長さんでした。」（細川護熙氏　当時熊本県知事）

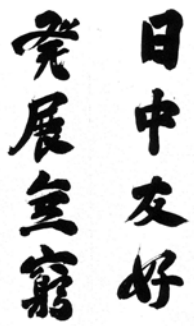
「市長の清潔な市政が熊本市政に対する信頼感となっており、単に市民だけでなく、県民なり、大きくは全国から、星子市長の*毅然とした姿勢が評価されていると思います。」（平野敏也　当時熊本日日新聞論説委員長）

私生活も本当に地味だったようで、市長時代に住んでいた家は借家で、帰宅は車を使わずほぼ歩いていたそうです。

敏雄は市長に就任して以来、「欲を捨てた」という言葉をよく口にしていました。「まあ*私利私欲だけは捨てたつもりですから…。私利私欲がいかに*儚いものかだけは一応わかっていますから…。」退任にあたってのインタビューで答えたこの言葉は、熊本市長が持つ「大きな権力」とそれに付いて回る「欲」というものにとらわれず、まじめに政治を行った敏雄の強い意思が伝わってきます。

また、敏雄が市政を行ううえでもっとも重視したのが「人間尊重」という視点です。前述した市長就任のあいさつでも「市政の基本は人間の心を大事にすること」としていて、在任中も「市政は市民生活の総合、反映」という言葉を何度も使っていました。この考えは、敏雄の過去の体験、つまりソ連抑留が大きく関わっているのではないかと思われます。

*即応…すぐに対応すること。　*遂行…やりとげること。　*実施…実際に行うこと。　*緊密…物事の関係がすきまのないほどぴったりとくっついていること。　*具現…実際に、具体的な形に現すこと。実現させること。　*風格…その人の容姿や態度などに現れる気高さや上品さ。　*切望…心から強く望むこと。　*清廉潔白…心や行ないが清くて正しく、私欲を図ったり不正をしたりすることのないこと。　*指摘…大切な点や注意すべきこと、欠点などを具体的に取り上げて指し示すこと。　*毅然…意志が強くしっかりしていて、物事に動じない様子。　*高潔…人柄がりっぱで、利欲のために心を動かさないこと。　*私利私欲…自分のための利益。自分一人の利益だけを考える気持ち。　*儚い…むなしく消えていくさま。



敏雄直筆の色紙
「日中友好発展無窮」

四期十六年の星子市政

清廉潔白な政治姿勢で、人間尊重という基本方針で取り組まれた事業は、次のようなものが挙げられます。

福祉面では、健康で明るい市民生活を目指し、次のような事業が行われました。一つは、児童手当を国より先に実施。二つ目は、老人医療費の助成。三つ目は寝たきり老人・0歳児・重度心身障害児医療費の助成と無料化。そして、一歳六ヶ月児検診。身障者福祉バスなどもあります。

国際交流では、中国の*桂林市やドイツの*ハイデルベルク市との友好を深めました。

東アジア各国との友好については、若いときから思い続けてきたとおり、中国はじめ韓国など日本と近い国々との友好関係が必要であるという考えのもとに進められたものです。

また、ドイツの都市と友好を深めたことについては、敏雄は、ドイツが古い精神文明を持つ国であることを理由にしています。昭和三十九年、石坂市長のときに始まったハイデルベルク市との関係は、星子市長時代も多くの分野で交流事業が続けられました。昭和五十六年には璋子夫人とともに、直接ハイデルベルク市を訪れ、友好都市関係を結ぶ足がかりを作っています。

結果、熊本市は昭和五十四年に桂林市と、そして平成四年にハイデルベルク市と国際友好都市となりました。

このほかの大きな事業としては、新市庁舎(現在の熊本市役所の建物)や*横井小楠記念館、総合体育館建設など、現在私たちもよく目にする施設建設のほか、毎年八月に開かれている「火の国まつり」の盛り上げにも力を注ぎました。

*桂林市…中国南部に位置する人口約五〇〇万人の都市。市内を北から南に流れる漓江(りこう)の両岸は、奇岩が連なる景勝の地で山水画のような景色が広がる。
*ハイデルベルク市…ドイツ南部に位置する人口十四万人の都市。ドイツ最古の大学、ハイデルベルク大学の所在地として有名。
*横井小楠記念館…幕末維新の思想家として知られる横井小楠の記念館。熊本市沼山津にある。

市長勇退後鹿本町名誉町民に

昭和六十一年十二月、四期十六年の長きにわたる市長の役を果たし、退任しました。市長就任のときは約四十五万人だった人口は、退任のときは五十六万人まで増え、中九州の中心都市となる熊本市の発展に力を尽くしたのでした。

市長を辞めた後は、熊本市にそのまま住んで、市長になってから我慢していた大好きな囲碁も再開して、妻の璋子さんと仲むつまじく余生を過ごしました。

昭和六十二年九月には、出身地である鹿本町から名誉町民として表彰され、さらに同じ年の十一月に勲二等瑞宝章を受けました。

そして平成七年七月十三日、八十九歳で波乱の生涯を終えました。お墓は若き日を過ごした旧第五高等学校近くにある小峰墓地(熊本市黒髪)と、生まれ故郷である鹿本町庄の納骨堂の二カ所にあります。

熊本市長を四期十六年務めた
星子 敏雄
TOSHIO HOSHIKO 1905～1995

年表 History

◆敏雄に関するできごと

明治三八年（一九〇五）▼	十一月九日、山鹿市鹿本町庄三三九番地で星子進とアサの長男として生まれる
大正十一年（一九二二）▼	熊本県立鹿本中学校修了
大正十四年（一九二五）▼	第五高等学校卒業
昭和三年（一九二八）▼	東京帝国大学法学部卒業
昭和三年（一九二八）▼	任関東庁警部・警務局保安課勤務
昭和四年（一九二九）▼	奉天（現在の中国　瀋陽市）警察署・奉天総領事館警察署勤務・外務省警部兼任
昭和五年（一九三〇）▼	警察官訓練所教官・警務局警務課兼務
昭和五年（一九三〇）▼	任関東庁属・長官房勤務
昭和六年（一九三一）▼	関東庁警視兼任・警察官訓練所教官勤務・警務局衛星課長心得
昭和七年（一九三二）▼	任関東庁事務官（内閣）・警務局保安課長 関東庁事務官在官のまま満州国政府建設の事務を援助
昭和七年（一九三二）▼	関東軍司令官より関東庁長官に対し、満州国政府に推薦したいという要請により、満州国政府に任官のため依頼免本官
昭和七年（一九三二）▼	満州国民政部警務司総務科長
昭和七年（一九三二）▼	国務院民生部事務官・派在国務院民生部警務司弁事
昭和九年（一九三四）▼	民生部理事官・派在民生部警務司弁事（地方司財務科長）
昭和十年（一九三五）▼	奉天省公署理事官・派在奉天省公署総務庁弁事（省長官房総務科長）
昭和十一年（一九三六）▼	民生部理事官・派在民生部地方司弁事（地方司財務科長）
昭和十二年（一九三七）▼	内務局参事官・派在監督処弁事
昭和十三年（一九三八）▼	安東省警務庁長
昭和十四年（一九三九）▼	奉天省警務庁長
昭和十五年（一九四〇）▼	総務庁企画処参事官
昭和十五年（一九四〇）▼	総務庁人事処長
昭和二〇年（一九四五）▼	東満総省次長
昭和二〇年（一九四五）▼	東満省次長
昭和二〇年（一九四五）▼	満州国滅亡のため自然退官
昭和二〇年（一九四五）▼	ソ連に抑留
昭和二一年（一九五六）▼	解放され帰国
昭和三二年（一九五七）▼	自由民主党本部九州開発特別委員会事務局嘱託
昭和三五年（一九六〇）▼	九州地方開発審議会専門委員
昭和三八年（一九六三）▼	熊本市助役（以後連続二期）
昭和四五年（一九七〇）▼	熊本市長初当選（以後連続四期十六年）
昭和六一年（一九八六）▼	熊本市長勇退
平成六二年（一九八七）▼	鹿本町名誉町民となる
平成六二年（一九八七）▼	勲二等瑞宝章を受ける
平成七年（一九九五）▼	熊本市にて永眠。享年八九歳。

◆世界の主なできごと

大正八年（一九一九）▼	第一次世界大戦終結
大正九年（一九二〇）▼	国際連盟発足
大正十三年（一九二四）▼	第一次国共合作
大正十四年（一九二五）▼	孫文死去、蔣介石が実権を握る
大正十五年（一九二六）▼	中国国民党北伐開始
昭和二年（一九二七）▼	南京国民政府成立
昭和三年（一九二八）▼	石原莞爾関東軍参謀となる
昭和六年（一九三一）▼	満州事変勃発
昭和七年（一九三二）▼	満州国建国宣言
昭和七年（一九三二）▼	五・一五事件
昭和八年（一九三三）▼	国際連盟から脱退
昭和十一年（一九三六）▼	二・二六事件
昭和十二年（一九三七）▼	日中戦争勃発
昭和十四年（一九三九）▼	ノモンハン事件
昭和十四年（一九三九）▼	第二次世界大戦始まる
昭和十六年（一九四一）▼	日ソ中立条約締結
昭和十六年（一九四一）▼	太平洋戦争始まる
昭和二〇年（一九四五）▼	ソ連が宣戦布告。満州、樺太などに侵攻。
昭和二〇年（一九四五）▼	終戦
昭和三一年（一九五六）▼	日ソ共同宣言
昭和五三年（一九七八）▼	日中平和友好条約

昭和 56 年 ハイデルベルク市訪問

名誉町民称号の記
星子敏雄殿
あなたは広く社会文化の興隆に寄与―その功績は顕著であります
よって鹿本町名誉町民の称号を贈り顕彰します
昭和六十三年九月吉日
鹿本町長 秦原忠義
鹿本町名誉町民の賞状

叙勲記念写真（璋子夫人と）

近代の山鹿の偉人たち　017
熊本市長を四期十六年務めた　星子 敏雄

平成 23 年 3 月 発行

山鹿市教育委員会　教育部　文化課
〒861-0501　熊本県山鹿市山鹿 1026-2
TEL　0968 - 43 - 1691

編集委員
芹川　一誠（山鹿市文化財保護委員）
山口　健剛（山鹿市教育委員会文化課）

参考文献・ご協力頂いた方（敬称略）
星子昭宇さん（熊本市）、星子千幸さん（鹿本町庄）

参考資料
熊本市『熊本市史』
熊本市役所十日会『真実に生きる』　昭和61年
星子敏雄「市政に想う」『くまもと市政だより』昭和 50 年～昭和 61 年
平川 厚「ご存知ですか？鹿本町出身人物紹介㊼」広報かもと